ニッポン熟考

モノづくりの現場から

フィリピン　進出へと背中を押した日比間の歴史的事実

伊藤澄夫　伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

当社は1996年にフィリピンに進出したが、現地の経済事情や国家間の友好度、国民性、マーケットと当社の競争力などできる限り多くの情報を入手した上で踏み切った。その際、会社の先頭に立つ立場の者として、国家間の歴史問題も調査した。フィリピン進出へと私の背中を強く押した隠れた理由には、そうして知り得た戦中戦後の日比間の歴史がある。

私はこれまで多くの機会を通じて、フィリピンに進出した理由と方法を世間に伝えてきたが、この部分の話は社員や親しい者にも伝えていなかったし、フィリピンの社員にすら述べてなかった。今回、本誌で初めて発信する。

戦争被害者親族の心情

戦後30年ほど経過したそのころ、当社の隣にあった漁網機械を製造するT社に、フィリピンから3人の技術者が技術研修のためにやってきた。全員がマニラ大学の工学部を卒業した中国系フィリピン人で、皆優秀な若者だった。

T社は商社経由で世界中に機械を輸出していたが、片言の英語しか理解できず、彼らに対して十分なおもてなしをしていないことが分かった。そこで私は定期的に彼らを自宅に招待し、すき焼きやカレーなどでもてなし、週末には周辺の観光地に連れて回った。

三重県の田舎である当地では、当時、めったに外国人は見当たらないこともあり、私は彼らを〝英語の先生〟と思って交流を図った。3人のうち2人は後に合弁会社の設立パートナーとなった。

残る1人のビクター・シー氏は物静かな秀才で、フィリピン人とは思えないネイティブ同等の英語力だった。彼の誕生日には奮発してホテルで会食をした。長時間歓談している中、歴史の話となった。その時、シー氏は「戦中、叔母が日本兵に殺害された」と一言言った。その場にいた者は突然の話に返す言葉もなく、静まり返った。

それまでの彼らからは戦時中の話題が出ることもなく、朗らかな交流を重ねていた。しかし戦後30年が経過したその頃でも、被害に遭った肉親の心をむしばんでいることが分かった。

会食が終わり、全員は何事もなかったようにお別れとなった。昭和の好景気で浮かれていたころの日本だったが、被害者の心の傷はそれほどたやすく癒されないことが分かった。そこで、私は日比の歴史をもう一度おさらいした。

2つの戦いの差異は

太平洋戦争末期、米軍は太平洋の島々を次々に制圧し、沖縄と本土決戦のため、次の前線基地としてフィリピンを手に入れたかった。その戦いがレイテ沖海戦だ。日本の陸海軍は既にまともな戦いができないほど消耗していた。

44年10月、関大尉は5人の部下を引き連れ、マバラカット基地から初の神風特別攻撃隊（敷島隊）としてレイテ湾にいた米空母に向かって発進した。もちろん米航空母艦初の撃沈だった。

米戦艦による艦砲射撃でレイテ島の住民の被害は半端でなかった。日本の輸送船による武器弾薬や食料の調達は次第に困難となった。日本陸軍兵士は飢えに苦しみ、民家から豚や鳥、野菜などあらゆる食量を奪ったのだ。先の大戦で日本軍から多大でさまざまな被害を受けたのがフィリピンだった。

この海戦の1ヵ月前、ペリリュー島の戦いが始まった。島民を借駆り出し滑走路が完成し米海軍が迫るのを察知した日本軍の中川隊長は、「共に戦いたい」と言う島民を「邪魔だ」とはねつけた。「今までの親交は飾りだったのか」と失意の島民を乗せた船が出る時、全兵士が海岸から手を振り見送ったことで、島民は涙したという。その後、1万人もの日本兵が玉砕したのに対して、島民の犠牲は無かった。

私が先の大戦で日本軍が犯した罪にもかかわらず、最大限に情けをかけてくれたと恩を感じるのは、56年に第6代フィリピン大統領となったエルピディオ・キリノだ。

有名なマニラの市街戦で日本陸軍は病院や教会、民家に立てこもった。米陸軍の砲撃と日本兵士による蛮行で、民間人10万人余りが犠牲となった。この戦いでキリノ大統領は妻アリシアと次男、長女、三女を失った。

戦後、数十人の戦犯は絞首刑となったが、モンテンルパ刑務所にいた105人の兵士に、そのキリノ大統領は突然恩赦を与えた。そして極度に対日感情が悪化していた折、元日本兵をマニラ港へ送り届ける際、警察を護衛につけたのである。

2つの戦いの違いはトップリーダーの判断。それ一つで日本が鬼になるか神になるかが分かれた。

今も良好な両国関係

20世紀の終わりごろ、私はレイテ島の皆さんにクリスマスプレゼントを計画した。島民に対する陰ながらのお詫びの気持ちからだ。当社のある工業団地の皆さんや取引先、友人にも協力をいただき、プレゼントはコンテナ3個の量となった。軽自動車1台、バイク12台、自転車23台、そのほか家電製品、石鹸、化粧品、シャツ、タオルなどの日用品だった。

先の大戦で日本から大きな被害受けたのは中国とフィリピンだ。そのフィリピンで25年間事業を継続しているが、いまだフィリピン人から昔の苦情を聞いたことがないどころか、国家間の関係もすこぶる良好だ。そして過去の出来事から「もし海外で事業をするならフィリピン」と考えていたので、たとえ100人でも雇用創出を実現できたことに静かな喜びを感じている。

いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。
（社）日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名誉教授、神戸大学非常勤講師を務めて後進の育成に寄与。
2017年4月春の叙勲「旭日単光章」受章。
著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。